

二 創立九十周年記念事業

昭和五十二年の東京芸術大学創立九十周年記念事業に向けて、昭和四十八年十二月、評議会において「東京芸術大学創立九十周年事業実行委員会要項」が定められた。

東京芸術大学創立九十周年記念事業

実行委員会要項

昭和四十八年十二月二十日 評議会裁定

1. 東京芸術大学創立九十周年記念事業を企画、実施するため東京芸術大学創立九十周年記念事業実行委員会(以下「委員会」という。)を置く。

2. 委員会の委員は、次の各号に掲げる者とし、学長が委嘱する。

- (1) 学 長
 - (2) 学 部 長
 - (3) 附属図書館長
 - (4) 評 議 員
 - (5) 芸術資料館長
 - (6) 学 生 部 長
 - (7) 事 務 局 長
3. 委員会の委員長は学長とし、副委員長は両学部長をもつてあてらる。
- (1) 委員長は会務を掌理し、副委員長は委員長を補佐し、委員

長に事故あるときは、その職務を代行する。

4. 委員長は委員会を招集し、その議長となる。

(1) 委員長が必要と認めたときは、本学職員に出席をもとめ、意見を聞くことができる。

5. 創立九十周年記念事業を実施するため、委員会に専門委員会を置く。

6. 専門委員会に関する事項については、別に定める。

7. 委員会の庶務は、事務局において処理する。 (タイプ・横組)

(「評議会議事録 昭和四十八年」)

九十周年記念事業の事業内容と音楽学部関連の概要は次のとおり。なお、九十周年記念演奏会に関する詳細な資料は本百年史「演奏会篇 第三巻」を参照のこと。

東京芸術大学(一九七七)
創立九十周年記念——展覧会・演奏会

展覧会・演奏会	会 期	会 場	入 場 料
① 所蔵名品展	9月2日(金)～10月16日(日) (但し、10月10日(月)体育の日を除き月曜日は休館・10月7日は午後休館 (9・00～16・30)	東京国立博物館 東京洋館特別展示室	大人 一五〇円 高次生 六〇円 小中学生 四〇円 他に団体割引有
② 美術教育展	9月1日(木)～9月30日(金) (但し、月曜日は休館) (10・00～16・00)	東京芸術大学 陳列館	無 料
③ 貴重図書展	9月1日(木)～9月30日(金) (但し、月曜日は休館) (10・00～16・00)	東京芸術大学 正木記念館	無 料

④ 音楽教育資料展	10月11日(火)～10月30日(日) (但し10月30日は休館) (10・00～16・00)	東京芸術大学 正木記念館	無料
⑤ 楽器展 西洋の音・東洋の音	10月11日(火)～10月30日(日) (但し10月30日は休館) (10・00～16・00)	東京芸術大学 陳列館	無料
⑥ 演奏会 定期演奏会 (第一七八回)	10月28日(金)～10月30日(日) (14・00～16・00)	東京芸術大学 音楽学部 第六ホール	招待者に限る
	11月1日(火) (19・00～21・00)	東京文化会館 大ホール	A席1,000円 B席700円

③貴重図書展

展示品は美術・音楽・演劇・文学関係の洋書約二〇〇点である。

光悦謄本

所謂、雲母刷模様の装本で著名な光悦謄本の一つで、百番本のうちの三十八冊に当る。

題簽の文字が光悦、絵が宗達と称され、光悦愛好家の間で高く評価されている。問題の題簽は、金泥・銀泥・緑青が肉筆で彩色されて居り美麗である。かつては、一枚の絵であったものを裁断して題簽に仕立てたものだという。装本の時代は慶長十三(一六〇八)年頃。画本虫あらし

喜多川歌麿の画になった狂歌本。虫類の生態を細密な描写によって捉え、精巧な彫りと摺りの技法によつて余すところなく表現した絵本である。とりわけ、この本は保存よく美本。狂歌四天王の一人宿屋飯盛の撰。跋文を歌麿の師の鳥山石燕が書いている。

天明八(一七八八)年刊。蔦屋重三郎版。

律呂三十六声麓の塵

地唄の楽譜。著者は座頭信市。享保十八(一七三三)年刊。五冊。三味線音楽ことに地唄の長歌譜として最も古い。十五冊所収。イロハ四十八文字のうちイからアまで三十六の勘所を使用する。文政十一(一八二八)年に大榛抄が出現するまでこれ程精細な楽譜はなかった。

申楽談儀

世子六十以後申楽談儀。和学講談所旧蔵本。世阿弥(一三六三～一四三三)が、六十歳を過ぎてから申楽やその他能楽のことなど物語ったことを次男元能が筆記したもの。この芸大本は影写本であると信ぜられているが、この本の原本といわれる由緒正しい写本の柳亭種彦旧蔵本が大正の震災で焼失してからは、この系統の唯一の伝本として貴重である。

④音楽教育資料展

東京音楽学校は、明治二十年に創立されたが、その歴史は更に明治十二年に設置された音楽取調掛までさかのぼることができる。そこで、音楽教育資料展では、この掛の設置以来の歴史を辿ってみることにした。

この展示準備中、もっとも関心をひかれたのは、音楽取調掛の八年間の業績であった。音楽教育の基礎作りのために、今日では想像もできないような努力の跡が見られるからである。今回そのすべてを公開することはできないが、多少なりとも音楽取調掛の業績をうかがえるように、当時の主要な出版物、訳書の草稿、楽器、所蔵図

書及び楽譜等を展示することとした。

明治二十年以降では、音楽専門学校の教育用として身近な教材であった図書類、教官及び卒業生により編集された学校教科書等の展示が中心となる。また、東京音楽学校では、音楽取調掛以来の伝統をひいて、教官グループによる種々の調査研究も行われていた。そのなかで、もっとも重要な邦楽調査掛の業績をも紹介することとした。

その他には、歴代校長の写真をはじめ、卒業記念や演奏会等の写真に合せて、演奏会プログラムを展示する。なお、この展示期間中、一昨年NHKテレビが放映した「東京音楽学校」のVTRと、昭和初期に行った定期演奏会の一部を録音したテープにより随意、鑑賞できるよう用意している。

⑤ 楽器展——「東洋の音・西洋の音」——

音楽資料として本学がどんな楽器を所蔵しているか御存知の方はごく僅かであろう。九十年の間には、いろいろと興味ある楽器が集められている。それらにより一昨年には東洋楽器展、昨年には西洋楽器展が開かれた。今回は、これまで出品されなかった楽器を中心に、洋の東西を問わず、弦楽器、管楽器、打楽器、その他の楽器をジャンル別に陳列し、「楽器展——「東洋の音・西洋の音」——」と題し、音楽研究者、音楽愛好者の期待に応えようと企画したものである。

楽器は目で見るだけでなく、耳で音色を体験して初めてその楽器に接したことができる。この楽器展では、音をエンドレス・

テープに収め、常時会場に流すことにした。順を追って楽器を眺めながら、音にも耳を傾けていただきたい。十八世紀に製作されたヴィオラ・ダモーレが鳴るかと思えば、一メートル半もある大三味線の演奏が聞かれ、引きずりそうなコントラバス・フルートやナチュラル・トランペットと並び篠笛、清笛しんてきが響く。それに現役のシンセサイザーも登場するとなれば、楽器とは、音楽とは、と改めて考え直すチャンスになるかも知れない。これらのいくつかの楽器については、十月十五日(土)と二十二日(土)〔14・00～16・00〕の二回、美術学部第一講義室に於て、芸大教官による解説とデモンストレーションが予定されている。その道の専門家達による話や演奏は、一層いきいきとした一面を与えてくれるに違いない。

その他、写真の蛇型のセルパンやツアウン(ビルマの竖琴)をはじめ、最近イラク大使館から寄贈されたジョーゼ、ルバープ、民族楽器には欠かせない様々な地方の太鼓類等が陳列され、一つ一つその周辺の音楽を心に漂わせながら眺めてみるのも、また楽しいものである。

⑥ 演奏会・定期演奏会

演 奏 会		於 音 楽 学 部 第 六 ホール	
10月28日(金)	14・00開演		
1. インドネシア音楽 ガムラン演奏(学生)		(2) 長 唄	岩 舟
2. 邦楽演奏(教官・学生)		(3) 箏 曲	晴天の鶴 御山獅子 御代万才
(1) 能 楽	花 筐		

10月29日(土) 14・00開演	10月30日(日) 14・00開演
「学生の演奏」 1. 室内楽 2. 学生オーケストラ(二年) 序曲「レオノーレ」第三番 3. 学生オーケストラ(三年、四年) 交響曲第三番 サン＝サーンス	「教官の演奏」 1. ピアノ 安川加寿子 2. ヴァイオリン 海野義雄 3. ピアノ 小林 仁 4. 電子音により作品 南 弘明 5. ソプラノ 瀬山詠子 ティンパニー 有賀誠門

定期演奏会(第一七八)	11月1日(火) 於東京文化会館大ホール 19・00開演
「天地創造」……………ハイドン	独唱 ソプラノ 西田宏子 テノール 市原多朗 バス 高橋大海 アダム(バス) 山村 民也 イブ(ソプラノ) 長島 洋子 合唱…東京芸術大学音楽学部声楽科学生 管弦楽…東京芸術大学管弦楽研究部 指揮…大町陽一郎

〔横組〕(『東京芸術大学へ一九七七』創立九十周年記念―展覧会・演奏会〔パ
ンフレット〕『芸大九十周年関係』より)

④の音楽教育資料展のために作成された目録より掲載する。

展示品一覧

図 書

I 音楽取調掛および東京音楽学校の出版物

- 1 小学唱歌集 初編 明治十四年十一月
- 2 小学唱歌集 第二編 明治十六年三月
- 3 小学唱歌集 第三編 明治十七年三月

この『小学唱歌集』全三編はわが国で最初に編纂された唱歌教科書であった。明治十三年四月にアメリカからメーソンを迎えた音楽取調掛ではさっそく教材作りに着手した。だが最初はその形ではなく、一曲ずつ出来上がった曲を掛図(後出展示番号164、165、166)にして一葉々作り上げ、それを教室では黒板にかけて教授するという方法がとられた。曲集はその後生徒一人々々が手に持つ教材として作られたものである。内容はメーソンによって輸入された『耳ザワリノヨイ外国曲』に日本語の歌詞を当てた唱歌が中心で、多少日本の伝統的旋法を基調とした新作唱歌が含まれている。そして今日なお親しまれている名唱歌を数多く生み出した。初編には見渡せば(むすんでひらいて)〜(蝶々)〜(うつくしき)ス コットランドのつりがね草)〜(螢(螢の光)〜など、第二編には(霞か雲か)〜(年たつけさ)、第三編には(仰げば尊し)〜(才女(アニー・ローリー)〜(菊(庭の千草)〜などが入っている。曲の選択はメーソン、伊沢修二、神津専三郎が、作詞は柴田清熙、稲垣千穎、加部厳夫、里見義らが担当した。なおメーソンは第二編の選曲半ばで帰国している。

参考までに、明治二十二年の調査による小学唱歌集の売れ行き

は初編が三二、〇〇七冊、第二編が一三、九七八冊、第三編が六、七六三冊と報告されていることを附しておく。

4 楽典 神津元訳、神津専三郎校訂 明治十六年七月

原著：J. Calcott: Musical Grammar. London

5 音楽指南 内田弥一訳 明治十六年七月

原著：L.W. Mason: National Music Teacher. Boston. 1872

6 音楽問答 瀧村小太郎訳、神津専三郎校訂 明治十六年七月

原著：John Jousse's Catechism of Music. London

以上三冊は音楽取調掛が翻訳出版した音楽書。タイトルから推察出来るように、いずれも音楽のABCを数えるごく初歩的な英語の入門書から訳されたものであったが、この訳業によって日本語の楽語が最初に創成された(展示番号40、46を参照)。明治十七年には小学校で唱歌科を担当する教師のため、前出の『小学唱歌集』全三編と共に文部省推薦の教科書として全国に流布した。

7 幼稚園唱歌集 明治二十年十二月

音楽取調掛においては、『小学唱歌集』をはじめ掛図等と同様に『幼稚園唱歌集』も唱歌教材作成の事業の一つであった。明治十六年七月には一応選曲が終了していたが歌詞の細かい言葉づかいに意見の食い違いがあり、ようやく二十年七月に出版の運びとなった。

8 箏曲集 明治二十一年十月

音楽取調掛では「国楽創成」の目的の一つとして、また当時の日本人にとって身近かな音楽であった箏曲や三味線音楽を教材に活用するという伊沢らの意図から、卑猥な歌詞が多いこれらの音

楽を改良する仕事が始められた。この改良の具体的な仕事は、取調掛の調査研究員であった山勢松韻(箏曲の大家)と内田弥一(英学者であり長唄に通じていた)が中心となって行った。その結果が『箏曲集』である。選曲は明治十六年にはほぼ完成していたらしく、この年の六月に刊行伺が出されたが、その後歌詞や曲のさし替えがあつて、結局明治二十一年十月に初版(英文緒言がある)が出版された。

9 中等唱歌集 明治二十二年十二月

十八曲は混声四部合唱の形で編集され、冒頭の〈君が代〉と〈天皇節〉および最後の〈憲法発布の頌〉を除くと全部外国曲に創作歌詞がつけられたものである。楽譜はすべてオリジナルが採用され、曲集中の〈君は神〉と題されたベートーヴェンの〈Die Eire Gottes〉やビショップの〈埴生の宿〉は音楽取調掛時代にしばしば歌われた曲であつた。なお〈君が代〉は現行のものと同様である。

10 音楽取調成績申報要略 明治二十四年三月

英文 Extracts from the Reports on the Result of the Investigations Concerning Music 明治十七年二月

音楽取調掛の創設に関するいきさつにはじまり、設置後の事業、つまり教材の作成、伝習生への授業、国歌按や俗曲改良、東西音楽の調査研究などの成果および研究経過を伊沢修二がまとめた報告書である。この『音楽取調成績申報要略』は、明治十七年に文部卿宛に提出された『音楽取調成績申報書』からカリキュラムの部分削除して出版されたものである。英文『音楽取調成績申報

要略』は十七年の『音楽取調成績申報書』と同時に編著され、海
外の博覧会に出品されている。

11 大元帥陛下奉迎の歌 明治二十八年五月

12 戦死者を弔う歌 明治二十八年十二月

13 凱旋の歌 明治二十八年十二月

14 孝明天皇祭 明治二十九年十二月

15 奉悼の歌 明治三十年二月

16 小学唱歌集、ピアノ・オルガン楽譜 明治三十二年六月

17 祝日大祭日唱歌重音譜 明治三十三年二月

明治二十四年六月、小学校令第十五条に基づき省令第四号を以て
小学校における祝日大祭日の儀式に関する規定が設けられ、その
第一条第四項に「学校長教員及生徒其祝日大祭日ニ相応スル唱歌
ヲ合唱ス」とうたわれた。だが当時はまだ定まった祝日唱歌はな
く、職責を感じた文部省は東京音楽学校校長村岡範為に祝日大祭
日歌詞及楽譜審査委員長を命じ文学者、音楽家、教育家など選出
された十五名の委員が、この任に当った。委員の中には当時雇教
師だったディットリヒも混じっている。その結果次のような祝日
唱歌が選ばれ、明治二十六年八月に公布された。以後戦前まで、
祝日には学校で式を行い〈君が代〉とその日の祝日唱歌が歌われ
た。〈君が代〉(古歌・林広守作曲)、〈勅語奉答〉(勝安芳作詞・小
山作之助作曲)、〈一月一日〉(千家尊福作詞・上真行作曲)、〈元始
祭〉(鈴木重嶺作詞・芝葛鎮作曲)、〈紀元節〉(高崎正風作詞・伊沢
修二作曲)、〈神嘗祭〉(木村正辞作詞・辻高節作曲)、〈天長節〉(黒
川真頼作詞・奥好義作曲)、〈新嘗祭〉(小中村清矩作詞・辻高節作

曲)。但し〈天長節〉は大正・昭和とそれぞれ新たに作られている。
したがって昭和では〈明治節〉という祝日唱歌がつけ加えられた。
東京音楽学校では選定した祝日唱歌を先づ掛図(展示番号171番参
照)に作成したが、その後合唱譜に編曲して公に出版したのがこ
の楽譜である。

18 東宮殿下御慶事奉祝の歌 明治三十三年四月

19 中学校唱歌 明治三十四年三月

中学校唱歌の三十八曲は半数が外国曲に歌詞をつけたもの、あ
と半数はすべて東京音楽学校の教官と研究科生の創作である。有
名な滝廉太郎の〈箱根八里〉や〈荒城の月〉が初めて発表された
のもこの『中学唱歌』であった。

20 中等唱歌 明治四十二年五月

中等唱歌は師範学校・中学校・女学校の教科書用に編集され、
ピアノ伴奏附で三十曲が選曲されている。編集者に外国人教師A・
ユンケルとH・ヴェルクマイスターが加わっているためか大部分
が外国曲である。だが歌詞は原曲に全く関係なく、作詞委員鳥居
枕・武島又次郎・吉丸一昌・乙骨三郎らの創作詞が当てられてい
る。

21 近世邦楽年表 常磐津富本清元之部 明治四十五年三月

22 箏曲集第二編 大正三年二月

23 近世邦楽年表 江戸長唄之部附大薩摩 大正三年九月

24 箏曲集第一編(改正) 大正三年九月

25 近世邦楽年表 義太夫之部 昭和二年一月

展示番号21番から25番までは邦楽調査掛の研究成果である。

26 皇太子殿下御成婚奉祝歌譜

大正十三年二月

この奉祝歌は今上天皇陛下の御成婚をお祝い申し上げて作曲されたものである。

27 合唱歌 昭和二年八月

メンデルスゾーン、ハウプトマン、ジルヘル、R・フランツ、シューマン、アプトらの作品と、スウェーデン、ナポリ、ドイツ、ボヘミア、スコットランドの民謡等から二十曲が選曲され、東京音楽学校の教官がオリジナルの歌詞から内容を生かした作詞を当てゝいる。作詞者は高野辰之・鳥居悦・佐藤誠実・中村秋香・黒川真頼・大須賀績作・武島又次郎・旗野十一郎・本居豊頼・乙骨三郎らである。この『合唱歌』は昭和初期の中学校・女学校で広く教材に使用された。中でもメンデルスゾーンの〈へお、雲雀〉やスウェーデン民謡の〈空しく老いぬ〉などは、この歌詞が定訳として、今日なお愛唱される合唱曲である。また明治二十二年から二十七年まで東京音楽学校に在職したR・ディットリヒの作品二曲が取り上げられているが同校の編集ならではと云える特長(?)であろうか。だが余り歌い継がれなかったようである。

東京音楽学校企画によるレコード

28 ヘンデル作曲、オラトリオ「ヘューダス・マッカベウス」より

合唱、三枚 昭和五年二月

この曲は昭和四年創立五十周年記念演奏で本邦初演(一部カット)を行った。東京音楽学校初のレコーディングである。

29 ワーグナー作曲「ローエングリン」 昭和八年一月

30 皇太子殿下御降誕奉祝歌

昭和九年十一月

31 祝祭日儀式用唱歌

昭和十三年一月

32 箏曲六段

昭和十三年九月

33 観世流謡曲「羽衣」

昭和十四年一月

34 観世流謡曲「橋辨慶」

昭和十四年一月

35 勇敢なる水兵

昭和十四年七月

36 東亜の黎明

昭和十四年七月

37 謡曲「鞍馬天狗」

昭和十五年七月

38 シューマン作曲「流浪の民」

昭和十五年七月

39 信時潔作曲・交声曲「海道東征」

昭和十五年七月

II 音楽取調掛における教材用草稿

40 約氏音楽問答、ユーシー著 滝村小太郎訳 草稿および原著

41 音楽指南、メーソン著 内田弥一訳 草稿

42 楽典、カルコット著 神津元訳、草稿および原著

43 西洋音楽小解 チェンバー百科事典の音楽の項より、滝村小

太郎訳、草稿

44 音楽歴史、B・ホント著、内田弥一訳 草稿および原著

45 西洋音楽調和法、ジョン・ハラー著、滝村小太郎訳 草稿および原著

46 唱歌法 愛米児孫(エメルソン)著、滝村小太郎訳 草稿

展示番号40から46の草稿類は全て英語の原文から訳されたものである。音楽取調掛の研究員は、これらの音楽書を訳すことによつて彼ら自身が音楽を学び、さらにそれを教材として伝習生へ教

授した。彼らの訳業は並たいていの苦勞ではなかったことが、この草稿から伺い知ることが出来る。なにしろ輸入したばかりの洋楽をどのようにして自分達のものにしていくか、原文の楽語の本来に意味するところもわからないまゝに手さぐりの状態で訳をつけていかなければならなかった。そのため誤訳・珍訳は避け得なかったが校訂者をつけて、より正確な訳をめざし、第一稿、第二稿と朱を入れて改めていった苦心のあとがありありとみられる。これらの草稿は今日、日本語の音楽用語がどのようにして作られたか、その初期の過程を知る上で興味深い資料となつてゐる。『約氏音楽問答』『音楽指南』『楽典』は明治十六年に印刷本で刊行されたが、その他は草稿のまゝ取調掛のテキストに使用された。

- 47 メーソンの弦楽初歩教授教材断片
- 48 箏曲集初編 原稿
- 49 採譜へ雲の上へ

III 授業の参考書

音楽取調掛の教師および東京音楽学校教員、卒業生によつて著述された初期音楽書と翻訳書

- 50 メーソン著 音楽捷徑 明治十六年
- 51 内田弥一訳 音楽の枝折 明治二十年
- 52 大村芳樹著 音楽入門 上下 明治二十年
- 53 恒川鑑之助著 楽典初歩 明治二十一年
- 54 文部省 楽理は西洋 明治二十一年
- 54 梅田磯吉著 歌曲は日本 明治二十一年

- 55 鳥居忱著 音楽道の上 上下 明治二十一年、二十二年
- 56 白井規矩郎著 音楽教科書 明治二十二年
- 57 鈴木米次郎著 音楽理論百ヶ条 明治二十二年
- 58 ウィーベ著 菊池武信訳 音楽訓蒙 明治二十二年
- 59 鳥居忱著 音楽階梯 明治二十三年
- 60 神津専三郎著 音楽利害 明治二十四年
- 61 鈴木米次郎著 新編音楽理論 明治二十五年
- 62 上原六四郎著 俗楽旋律考 明治二十八年
- 63 神津専三郎著 和声学初歩 明治二十九年
- 64 石倉小三郎 西洋音楽史 明治三十八年
- 65 福井直秋著 初等和声学 明治四十一年
- 66 コーテ著 東京音楽学校訳 (上野直昭訳) コーテ氏音楽史要 大正二年
- 67 富尾木知佳著 西洋音楽史綱 大正五年
- 68 村岡範為馳著 実験音響学及音楽理論 大正六年
- 69 田村寛貞訳著 ハンスリックの音楽美論 大正十三年
- 70 瀬戸口藤吉著 管絃楽器の取扱法 大正十四年
- 71 マイエルホッフ著 管絃楽器論 大正十四年
- 72 片山頼太郎訳 カース、A著 管絃楽及管絃楽法の歴史的研究 大正十四年
- 73 大田黒元雄訳 クレール著 音楽通論 昭和二年
- 74 信時潔・片山頼太郎共訳 アルス西洋音楽大講座 昭和四年

IV 学校教科書

次の教科書はいづれも音楽取調掛および初期の東京音楽学校教官、あるいは卒業生によって編集されたものである。

75	大和田建樹 奥 好義 共編	明治二十一年
76	奥 好義編	明治二十二年
77	大和田建樹編	明治二十五年
78	同	明治二十五年
79	伊沢修二編	明治二十五年
80	小山作之助編	明治三十五年
81	納所辨次郎 田村虎蔵 共編	明治三十六年
82	同	明治三十六年
83	山田源一郎編	明治三十六年
84	楠美恩三郎編	明治三十七年
85	鈴木米次郎編	明治三十八年
86	佐々木吉三郎 納所辨次郎 田村虎蔵 共編	明治三十八年
87	大橋銅造 納所辨次郎 田村虎蔵 共編	明治三十九年
88	天谷 秀編	明治四十一年
89	文部省唱歌 尋常小学読本唱歌	明治四十三年

- 90 尋常小学唱歌 一学年～六学年 明治四十四年～大正三年
 - 91 新訂尋常小学唱歌 一学年～六学年 昭和七年
 - 92 ウタノホン 上 昭和十六年
 - 93 うたのほん 下 昭和十六年
 - 94 初等科音楽 一～四 昭和十七年
- 今日一般に「文部省唱歌」と呼ばれているのが展示番号89から97までの唱歌集である。明治四十一年文部省は国定教科書に準ずる唱歌教科書の製作を東京音楽学校に依頼した。その中で次のような重要な条件がつけられた。「従来の検定教科書に多くみられるような外国曲は取り入れないこと。すべて新たな創作であること」。
- 東京音楽学校ではさっそく作詞委員高野辰之、武笠三、吉丸一昌、乙骨三郎、富尾木知佳らと、作曲委員上真行、小山作之助、島崎赤太郎、楠美恩三郎、岡野貞一、南能衛らを選出して仕事にとりかゝった。先づ『読本』の教科書と並行して用いられるように『読本』の中の韻文を作曲し『尋常小学校読本唱歌』と題して明治四十三年に完成させた。次いで翌年から大正三年にかけて各学年毎の『尋常小学唱歌』が完成し、文部省の準国定教科書として日本中で使用されるようになった。その後時代に応じて委員も更新され、昭和七年、十六～十七年と改訂版を出版し、二十二年の改訂を最後に文部省唱歌の幕を閉じるのである。（但し昭和二十二年の改訂版は、占領下にあつて軍国主義的、国粹主義的唱歌はすべて削除され、その代り外国の民謡が多く取り入れられている。残念ながら芸大では所蔵していない）。

V 明治・大正時代の音楽雑誌（一）内は創刊年

98	音楽雑誌	音楽雑誌社（明二十三）	明治二十四年
99	音楽之友	楽友社（明三十四）	明治三十四年
100	音楽	楽友社（明三十四）	明治三十四年
101	能 楽	能楽館（明三十五）	明治三十五年
102	音楽新報	共益商社（明三十七）	明治三十九年
103	歌舞音曲	歌舞音曲会（明四十）	明治四十年
104	音楽世界	十字屋楽器部（明四十）	明治四十年
105	音楽界	音楽教育会（明四十二）	明治四十一年
106	音 楽	東京音楽学校校友会（明四十三）	明治四十三年
107	演芸画報	演芸画報社（明四十）	大正二年
108	演芸倶楽部	博文館（明四十五）	明治四十五年
109	月刊楽譜	月刊楽譜発行所（明四十五）	大正五年
110	教育音楽	日本教育音楽協会（大十二）	大正十二年

楽 譜

I ピアノ教則本

111 Beyer, Ferdinand (1803-1863)

Elementary Instruction Book for Piano. Boston: Carl

Pfifer.

『バイエルピアノ教則本』は音楽取調掛にメーソンの着任（明治十三年春）と同時にポストンから取り寄せられた最初の楽譜である。この時、他にチェルニー、ディアベリ、クララウ、ケーラー等の教則本も混じっていたが、これらは一冊とか二冊、多くて

も六冊であったのに、なんとバイエルは二十冊も買い入れられていた。十月に伝習生が入学してくるとさっそくこのバイエルでピアノのレッスンが開始された。当時の時間割をみるとバイエルの進度を示す一回のレッスンのノルマが記されている。一〇〇年近い年月、わが国のピアノ入門がバイエル一辺倒で行われてきた端緒はまさにここにあったわけである。取調掛が使用したバイエルはタイトルから明らかなようにドイツ版を英訳した楽譜である。

112 Urbach, K.

Prize Piano School awarded the prize offered for completion trans. from the 8th German Edition by Eliza

M. Wiley. New York: E. Schuberth, 1881

この教則本は明治十五年の後半から音楽取調掛のピアノ進度表にのぼるようになった。この頃になるとバイエルは最初の一年で終り、二年目から四年目まで通して「ウルバヒ」（資料にしたがった発音）が用いられた。今日では全く知られていないこの教則本は、メーソンの帰国（明治十五年七月）後、取調掛で洋琴伝習を受け持った瓜生繁によつて採用されたものと思われる。彼女は明治四年に文部省より米国留学を命ぜられ、十一年九月にはニューヨーク州ポキプセ府バッササ女子大学に入学十四年六月同校の音楽科を卒業した。もともとドイツ原本の『ウルバヒ氏教則本』を英訳したのはバッサ・カレッジの先生で、バッササ女子大学では「ウルバヒ」を使っていたことは疑う余地がない。そのようなわけでこの教則本を取調掛にもたらしたのは瓜生繁であると断定しても差し支えないであろう。

内容は指の訓練に始まり、わが国でもよく知られている民謡へこぎつねこんこんへちようちようへABCのうたなどごく簡単な小品がつぎ、もつと進むと今日ピアノ学習者に親しまれているクラウ、クレメンティのソナチネがあり、それらの間には和声学の簡単な解説と用例、カデンツの形成法、コラールの楽譜、シューベルトの歌曲、モーツアルトやウェーバーらのオペラの編曲、その上連弾もあるという一冊ですべてが片附くような教則本である。序言の効能書には「忍耐強く経験をつんだ教師の手にかゝれば、きわめて短期日のうちに必ず芸術的に十分満足すべき結果が得られるはず」とうたわれている。

113 Wieck, Friedrich (1785-1873)

Method of Piano-Forte Instruction compiled and ed. by Alwin Wieck, according to this method Friedrich Wieck conducted the education of his daughter, Madame Clara Schumann. Boston: Carl Pfrifer, 1875.

この教則本も原本のドイツ版から英訳されたものであり、バイエルと同じく明治十三年に買い入れられた。だが音楽取調掛の授業にどのように活用されたか記録がない。ヴィークは十九世紀のドイツにおける高名なピアノ教師であった。というのもののちにピアノリストに成長し、ロベルト・シューマンの妻となった娘クララに対する教授法が功を奏したからである。その娘に与えたのがこの教則本である。ヴィークの弟子には娘婿シューマンやハンス・フォン・ビューローらがいる。

114 奥 好義 (一八五七〜一九三三) 著 洋琴教則本 寛裕舎蔵

版 明治二十三年

内容的にはバイエルと変りないが、奥好義は、彼が考える今後のピアノ教授法のためにバイエルに欠けている点を補ない、更に楽しんで学べると云うことを目的として編集した教則本であった。彼はバイエルの型にはまった練習曲の合い間に適宜音楽取調掛が出版した小学唱歌の中からピアノ（あるいはオルガン）曲に編曲した曲を挿入させ学習のよろこびを与えている。また巻末には二十四種の音階と楽語表を附し、ピアノ学習上最少限度の知識が備わるように意図されている。奥好義は宮内庁楽部の伶人で明治十三年に音楽取調掛に入學し、翌年から母校で教鞭をとった。この教則本を著した頃は東京高等師範学校の助教教授であった。

II 幕末から明治にかけて日本に在留した外国人の作品

115 Siebold, Philipp Franz Jonkheer Balthasar von (1796-1866)

Japanische Melodien gesammelt von J. Ph. F. v. Siebold
シーボルトは一八二三（文政六）年に長崎出島商館のオランダ人医師として来日、西洋医学を日本に植えつけるかたわら日本に関するあらゆる研究資料を収集した。日本の種々の俗謡をテーマにしたこのピアノ曲も彼の日本研究の一端であった。

116 Mason-Isawa

He To Tsu; Theme by Japanese Children's Song. Variations for Piano solo

日本のわらべうたへかぞえうたをピアノ変奏曲に編曲したも

のである。これは一八七六年アメリカ独立一〇〇年記念の博覧会が開かれたとき、当時アメリカに留学中であった伊沢修二が師メーソンの協力を得て編曲し、博覧会に出品した。

117 Eckert, Franz (1852-1916)

Souvenir de Tokio, Defilir-Marsch für Piano-Forte.

エッケルトは明治十二(一八七九)年の春、海軍々楽教師として来日した。十六年二月から音楽取調掛で管弦楽と調和(和声)を担当。彼は日本の伝統音楽に非常な興味を持ち熱心に研究した。そのことは取調掛が目ざした「和洋音楽を折衷して国楽を興す」仕事に大きな影響を与えた。なお、今日演奏される〈君が代〉の器楽合奏の和声付は彼が行ったものである。

118 Leroux, Charles

Airs Japonais et Chinois (自費出版) 1887 (明治二十年)

表紙は Bigot による絵

シャルル・ルルーは明治十七年から二十二年まで陸軍々楽隊を指導したフランス人音楽家である。エッケルトと同様に彼も日本古今の音楽を研究し著書や編作曲も残っている。明治十八年七月十日の音楽取調掛の音楽会に彼の曲が演奏されている。彼は日本の陸軍々楽に改革をもたらし、今日への基礎を作った。

119 Sauvlet, Guillaume

Nippon Valse. Respectueusement Dédicé Madame La

Comtesse Ito. Tokio: 1886 (明治十九年)

ソープレットは明治十九年四月、オランダからピアノ教師として音楽取調掛に招かれた。彼は二年間在職したが、その間、明治

二十年二月には取調掛の第二回全科卒業演奏会においてベートーヴェンの交響曲第一番を指揮した。

120 Ditrich, Rudolf (1861-1919)

Nippon Gakufu: Sechs japanische Volkslieder. Leipzig:

Breitkopf & Härtel, 1894 (明治二十七年)

121 Ditrich, Rudolf

Rakubai 落梅 手書き

122 デイットリヒ和声付け小学唱歌草稿

デイットリヒは明治二十二年から二十七年まで東京音楽学校に在職した。音楽取調掛以来招いた外国人教師の中では、はじめての芸術家で日本の当時の音楽界に真の音楽芸術をもたらした。彼もエッケルトや他の外国人と同様に、日本音楽に興味を持ち、数曲の編作曲と日本音楽に関する研究論文も発表している。

III 東京音楽学校における本邦初演に使用した楽譜

123 Händel, Georg Friedrich (1685-1759)

Judas Maccabäus. Full Score. Leipzig: Peters

昭和四年十一月三十日演奏 S 長坂好子 M S 田中宣子

T 木下保 T 蘭田誠一 B 伊藤武雄 指揮、ラウトルupp

124 Gluck, Christoph Willibald (1714-1787)

Orpheus. Piano-Vocal Score. Leipzig: Peters.

明治三十六年七月三日演奏 オルフエオ A 吉川やま

エウリディチェ S 柴田環 愛の女神 S 宮脇遷

指揮ノエル・ペリー

125 Beethoven, Ludwig van (1770-1827)

Symphony No.9 Full Score. Leipzig: Breitkopf & Hartel
大正十三年十一月二十九日演奏 S 長坂好子 A 曾我部静子

下 沢崎定之 B 船橋栄吉 指揮 G・クローン

126 Schubert, Franz (1797-1828)

Symphony No.8 "Unfinished" Full Score. Leipzig: Breitkopf & Hartel

明治三十三年五月二十日演奏 指揮 A・ユンケル

127 Mahler, Gustav (1860-1911)

Symphony No.3 Full Score. Leipzig: Peters

昭和十年二月十六日演奏 A 平原寿恵子、児童合唱、上野児

童学園児童 指揮 K・プリングスハイム

Symphony No.5 Full Score. Leipzig: Peters.

昭和七年二月二十七日演奏 指揮 K・プリングスハイム

IV 東京芸術大学 ヘメッサイアへ 連続演奏使用楽譜

Händel: Messiah

128 Urtext. Leipzig: Peters (原典版)

129 Bearb. von Mozart. New York: Kalmus (ギンシアルト版)

130 Orchestration by Prout. New York: Carl Fischer (ブラ
ウト版)

V 貴重楽譜

131 Händel, Georg Friedrich (1685-1759)

Messiah. Bearb. von Mozart. Leipzig: Breitkopf &

Hartel, 1803 (初版)

132 Haydn, Joseph (1732-1809)

Die Jahreszeiten. Leipzig: Breitkopf & Hartel, 1803 (初
版)

133 Strauss, Richard (1864-1949)

Festmusik

134 Pizzetti, Ildibrando (1880-1968)

Sinfonia in La

135 Ibert, Jacques (1890-1962)

Ouverture de Fête

136 Britten, Edward Benjamin (1913-)

Sinfonia da Requiem, Op. 20

展示番号133から136はいずれも手書きの総譜。昭和十六年、当時の政府主催による日本の紀元二千六百年祝典にシュトラウスはドイツからピツエッティはイタリア、イベルはフランス、ブリットゥンはイギリスからそれぞれお祝として寄せられた楽譜である。

137 滝廉太郎作曲〈四季〉東京、共益商社 明治三十三年初版

邦楽調査掛関係資料

「邦楽調査掛」は、明治四十年十月に東京音楽学校内に設置された機関である。そこでは音楽学校の職員のほかに、外部からも数多くの演奏家、研究者が嘱託として事業に参加し、邦楽に関してさまざまな面からの調査、研究を行った。その成果の一部は『近

世邦楽年表』三冊と『箏曲集』二冊（音楽取調掛のものとは別）として公刊されている。

邦楽調査掛で作成・収集された各種の記録・文書等の多数の資料が芸大図書館に残されている。ここには、それらの中から、特に興味深いものを選んで展示する。同種の資料が多数あるものについては、その中から一点または二、三点のみ展示する場合がある。

なお、この時期に邦楽演奏会を何回か主催した「邦楽会」は、この邦楽調査掛の関係者によって組織され、調査掛に事務所を置き、会場には奏楽堂を多く用いるなど、東京音楽学校と密接な関係を有するもので、その関係資料を展示に含めた。

138 出勤簿（明治四十一年一月～十二月）

139 日誌（明治四十年八月十七日起）

140 日誌（明治四十年十月一日～十二月二十日）

141 火曜日例会議事録第一・第二

142 東京音楽学校邦楽調査関係書類上・下

143 調査成績報告書四種（大正十五年四月～十二月提出）

民謡

一中節

雅楽

菅野一中節

144 兼常清佐 日本人の音楽意識の内容に就て―実験とその予測

145 兼常清佐 高野辰之宛書簡

146 調査済詞章第一期

147 吉丸一昌校訂 箏曲集第二編

148 奥浄瑠璃調査記事（明治四十三年十一月二十日）

149 記譜法（五線譜）関係資料五種

150 延寿の保名三通対照

151 各種目五線譜

謡曲 花月

箏曲 箏曲集第三編原稿

一中節 稽首国道節

河東節 河東節曲節集

蘭八節 道行相合炬燵

富本節 幾菊蝶初音道行前編

152 近世邦楽年表資料カード（長唄）

153 近世邦楽年表原稿数種

154 能楽図書展覧会関係書類三種

桜間左陣

丸岡 桂

織田小覚

155 能楽図書展覧会来観者名簿

156 能楽図書展覧会書類・雅楽図書器具展覧会書類

157 邦楽演奏会曲目（明治四十年十二月二十一日）

158 邦楽会 趣意と規定

159 邦楽会第一回演奏会（大正四年五月二十六日）関係印刷物数種

160 邦楽会演奏会番組連名三種

一中節

清元節

長唄

161 第十六回邦楽演奏会ポスター

162 邦楽演奏会関係写真五種

第一回関係者（大正四年五月二十六日）

第四回関係者（大正五年三月十九日控室にて）

第八回清元節演奏スナップ（大正六年三月十一日）

三曲演奏スナップ（回次不詳）

長唄演奏スナップ（回次不詳）

掛 図

163 Mason: National Music Charts. 1st & 2nd Series. Boston, 1872

メーソンはボストンにおいて彼の唱歌教育指導書並びにその教材として National Music Teacher（『音楽指南』）、National Music Readers および National Music Charts を編纂した。この三種類を並用することがメーソンの主唱する教授法であったから、これらはメーソンの来日に際し欠くことの出来ない教材となつて持参された。この掛図は全四編からなり学校と家庭における Singing Classes で使用出来るように作られてある。

164 唱歌掛図初編 音楽取調掛作成 明治十五年四月刊行

165 唱歌掛図初編の続編 音楽取調掛作成 明治十五年四月刊行

166 唱歌掛図第二編 〃 明治十六年六月刊行

音楽取調掛では唱歌演習の最初の教材としてメーソンの掛図を

母体として唱歌掛図を作製した。掛図の使用は教室で生徒たちの目を一齐に一ヶ所へ集中させ、落ちこぼれない授業を行えるという効果があった。メーソンのメトードはそっくりそのまゝ採り入れられ歌曲もメーソンの掛図の1/3がこの中に見出される。歌詞の選定のために幾度となく交された文部省との意見交換の末、初編と続編は明治十五年四月に、第二編は十六年六月に出版された。第三編の原稿は現存しているが印刷発行はされていない。

167 Tunings of Different Instruments used in Japanese Classical Music 音楽取調掛作成

168 西洋音階と日本音階との比較図 音楽取調掛作成

169 セント・グレゴリー氏変格旋法 〃

170 セント・アンブローズ氏正格旋法 〃

音楽取調掛では国楽創成のために種々の調査研究が行われていた。展示番号167から170の掛図はその研究の一環である日本と西洋の音階および旋法の比較研究を図解し、掛図にして解説したものである。上記の唱歌掛図も合せて、既出の小学唱歌集や三種類の音楽書など音楽取調掛の出版物は明治十七・十八年のロンドンとニュー・オーリンズの万国世界博覧会に出品されている。

171 祝日大祭日唱歌掛図 東京音楽学校作成 明治二十九年十二月刊行

版 本

172 音楽取調掛著 小学唱歌集 版本

173 〃 〃 掛図版本

『唱歌掛図』および『小学唱歌集』は木版印刷である。版木はこのために作製されたものである。『小学唱歌集初編』発行後、明治十五年五月に、以後増刷する際には本省で行うようにとの通達があり、版木の大部分が文部省へわたされた。

記録類

174 音楽取調掛文書綴

文書綴は音楽取調掛が文部省各局と取り交した往復書類綴である。これらの綴は取調掛の起案書その他を含み、わが国の音楽教育創始の実態、つまり取調掛の目的に始つてその運営・活動・生活などを跡づける生の第一次資料であり、われわれにその全容を明かにしてくれるものである。具体的に云えば、伝習生への授業内容、教材作成および楽器試作の過程、国歌按(明治頌)、在来日本音楽の調査研究、師範学校や学習院への唱歌教育、対海外活動、地方への唱歌教育指導、人事、予算等にわたり、ひと方ならぬ苦勞を重ねた取調掛の業績が綴られている。

明治二十六(一八九三)年シカゴ・コロンブス世界博覧会出

品目録

明治時代を通して数回世界の博覧会に参加したが、中でも最も大規模に出品したのがこの博覧会であった。東京音楽学校が音楽のセクションに出品したのは次のようなものである。雅楽器十三点、俗楽器十一點、清楽器十三点、山葉寅楠製作のオルガン、鈴木政吉製作ヴァイオリン等十三点、舞楽絵屏風(展示番号183屏風参照)、奏楽絵と劇場絵の額、能楽絵の巻物、雅俗楽器写真、音叉、

音楽取調掛以来の出版物『小学唱歌集』、『掛図』などに加え当時のわが国で出版されていた音楽書等、二十三冊。

176 音楽会批評等の新聞切り抜き

明治二十五年、三十三年、三十七年、三十八年、

昭和九年、二十六年、二十七年、

177 東京音楽学校一覽

178 東京音楽学校および東京芸術大学音楽学部演奏会プログラム

明治三十一年十二月四日に第一回の東京音楽学校定期演奏が行われて以来、幾多の変遷を経て今年十一月一日の創立九十周年記念演奏では一七八回をむかえる。明治・大正期の東京音楽学校は、音楽教育者の養成、芸術家の育成、ヨーロッパ音楽の開拓と啓蒙など、音楽に関するあらゆる任務を背負い、文字通り音楽の総本山とも云うべき役割りを果たした。その役割りの一つである演奏活動は、今日残されているプログラムからどんなに意欲的に行っていたか、十分にしのぶことが出来る。今回こゝにすべてのプログラムを展示することが出来ないのは残念であるが、この一部分のプログラムから活動の一端を推察していたゞきたいと思う。

楽器およびその他

179 音楽取調掛製作本邦第一号オルガン、明治十四年

才田光則作

音楽取調掛が最初に取り組んだ楽器研究は小さなリード・オルガンであった。唱歌教育を実施するのにピアノが最適であることは云うまでもないが、輸入しなければならない上に高價であつて

は諸学校が簡単に備えるわけにはゆかない。そこでオルガン製作を唱歌教育事業の一環に取り入れた。取調掛はメーソンから二台のオルガンを買入れ、一台は授業に使い、破損のひどいもう一台は解体してその構造を研究し試作することにした。この試作を取調掛は才田伊三郎に依頼し、明治十四年十二月にはこゝにみられるような第一号オルガンが完成した。小型であるが六個のストップを持ち、総二列笛。今日に至るまで四回修理されている。オルガンに入っている銘では「才田光則」となっているが才田伊三郎と同一人物である。

180 スクエア・ピアノ Chickering Square Piano

音楽取調掛は明治十三年にこの型のピアノをアメリカから十台購入している。このピアノがその中の一台であるかは明かではない。スクエア・ピアノは一七五八年頃ドイツで製作され表情に富むやわらかな音をもち、軽便で廉価だったため十八世紀後半から十九世紀にかけて非常に多く作られた。だがアップライト・ピアノの出現により十九世紀中葉からヨーロッパでは使われなくなってしまった。今日では全く見られなくなった古い型のピアノとして興味深い。

181 メーソン持参のピアノ Knabe upright Piano

明治十三年、メーソン着任の際、持参した彼個人のピアノである。当時は痕跡がみられるように正面左右に燭台があった。

182 音楽取調掛製作音叉

この音叉は日本の伝統音楽の音高を示すもので音楽取調掛が考案した。明治十八（一八八五）年音楽取調掛はこれをロンドン万

国発明品博覧会に出品した。その際、この音叉に非常な興味を示したイギリスの高名な音楽学者A・J・エリス（一八一四〜一八九〇）はセント値の測定を行い、取調掛の業績を称賛した書簡を伊沢修二に寄せている。測定値を記入した紙片はエリスの自筆である。

183 Ibach Grand Piano 三重交叉絃放射状鍵盤

大正元年九月、標本として買入れられ、授業には使用されなかったようである。このピアノはライン地方の工業都市ヴッペルタル Wuppertal のバルメン Barmen に一七九四年アドルフ・ヨハネス・イーバッハ Adolf Johannes Ibach（一七六六〜一八四八）が創立した有名なピアノ製造会社の製品である。戦前わが国へも相当数輸入された。

184 手廻し蓄音器 ビクター九号

大正八年三月買入れ。昭和の初めに電蓄が備えられるまで授業用に使用されていた。その後昭和三十年頃まで、興味をもつ教官や学生が時折昔のSPレコードをかけて鑑賞する姿も見られたが、今日では参考器具として資料館に保管されている。

185 東京音楽学校々旗

186 東京音楽学校々章 右〃女子生徒用

左〃男子生徒用

187 東京芸術大学校章

188 演奏会ポスター

189 舞楽絵屏風

〔横組〕

（『東京藝術大学創立九十周年記念 音楽教育資料展目録』東京藝術大学音楽学

⑤「楽器展」の展示目録より以下掲載する。

A—I 共鳴弦を持つ楽器

1. ヴィオラ・ダモレ (viola d'amore)

ランドルフィ(Carlo Ferdinando Landorfi)作、一七十五年(伊)。十七世紀にヴィオル属から派生した弦楽器で、西洋のものでは珍しく共鳴弦をもっており、通称「愛のヴィオル」という名前で親しまれている。バロック時代、ヴィヴァルディの六曲の協奏曲などがあるが、前古典期から古典期にかけての十八世紀に、当時の音楽の作風とこの楽器の特性が一致するに及んで、一時大へん珍重された。カール・シュターミッツ等はこの楽器の名手であり、ヴィルトウオーゾな作品を生んでいる。しかしその後、演奏面でのあまりの複雑さがわざわざいって衰退の一路をたどった。他の楽器と比較して著しく異なる点は「共鳴弦」を持つていることのほか、調弦法が多様で等間隔調弦でなく、その曲の主和音を開放弦のみで用意することが多く、運指法が一定しないことである。

(浅妻)

2. シタール (sitar)

北インドの代表的撥弦楽器。旋律弦四本、高音伴奏弦二本のほか、通常十一〜十五本の共鳴弦をもち、演奏する楽曲の音階(ラーガ)に必要な音に予め調律して、音色と残響効果を高める。

シタールに共鳴弦が用いられるようになったのは比較的新しく、多分弓奏楽器の影響と考えられる。

(小泉)

3. サールンギ (sarangi)

北インドの擦弦(弓奏)楽器。声楽の伴奏や舞踊音楽に主として用いられる。普通三本の太いガット弦が演奏に、十五〜四十本の細い金属弦が共鳴のためにとり付けられている。胴は一木をくりぬいたもので、下部の表面に皮を張る。馬毛の弓で擦奏するが、左手の指の爪を弦の横から押しあてて、弦長を加減するので、ポルタメント奏法に適している。

(小泉)

A—II 三味線のいろいろ

1. 三線 (さんしん)

本土と同じように三味線と呼ぶこともあり、また俗に蛇皮線^{じゃびせん}などともいうが、沖繩に特有の撥弦楽器で、本土の三味線の祖先にあたるもの。胴に蛇皮を貼り、普通の三味線よりやや短い。第一弦も上駒の上を通っているもので、いわゆるサワリの効果はないが、深い深味のある音色をもち、奏者の爪か、小型のピックないし、人さし指にかぶせる角製の義爪ではじく。

(小泉)

2. 高音三味線 (こうおんしやみせん)

別名シャミドリンともいう。山田抄太郎がマンドリンをヒントに考案演奏した。胴が丸く、糸巻きがギターのネジのようになっていて、勘所が胴のきわまで使えるように、棹の表面の端が胴皮に接触している。調弦は普通の長唄三味線に対して、一オクターブ上である。

3. 長唄三味線

4. 地唄三味線 (じうたしやみせん)

三味線の寸法および音域対照表

三味線	高音	長唄	清元	地唄	低音 1	低音 2	大三味線
	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm
全 長	64.0	97.0	98.5	99.4	108.0	113.0	146.0
乳袋下より海老尾先まで	11.0	14.8	15.5	15.6	13.0	14.2	33.0
鳩胸下より中木先まで	25.5	22.3	24.5	25.8	28.0		52.0
	(丸胴)						
胴 縦	18.0	19.6	20.2	20.2	22.2	24.0	31.8
横	19.0	18.0	18.0	18.4	20.8	22.0	27.4
糸巻 長さ	(ねじ状)	12.2	13.0	12.4	12.8	12.2	28.0
	3.8						
直径		1.4	1.7	1.8	1.6	1.7	2.5
撥 長さ	12.0						40.7
重さ							1150.0 g
音 域	h' - h''	h - h'			fis - fis'	H - h	

5. 清元または常盤津^{アマ}三味線(きよもとまたはときわずしやみせん)
6. 義太夫三味線(ぎだゆうしやみせん)
7. 低音三味線(ていおんしやみせん) 一
- 名庭絃阿弥が考案、演奏した。
8. 低音三味線 二
9. 竹澤弥七の大三味線

作者は「東京浅草山之宿大黒屋幸吉作」弾奏者は七代目竹澤弥七(天保二年生れ)である。竹澤弥七は、明治二年に堀江の芝居で大三味線を弾き、同七年には浅草で大三味線を弾いたとの記録が残されている。

A-III ハープ前史

1. ツアウン (psalm)

ビルマの弓型ハープ。俗にビルマの竖琴(たてごと)として知られる。古代インドの弓型ハープが仏教とともにビルマに伝えられたと考えられるが、インドその他ではすでに失われている。

弦数は普通十三本であるが、十二〜十六まで各種あり、奏者はこれを抱えこみ、右手ではじく。調弦は五音音階であるが、左手の親指ないし人さし指でストップして音高をかえることもできる。

(小泉)

2. ペダル無しハープ

現在西洋音楽で用いているハープはペダルによって、音階に用いられる音を半音上げたり、下げたり出来るが、以前にはこの装置がなく、予め調号によって調律しておかなければならなかった。このペダル無しハープは、現在でも南米のパラグワイ等では民族楽器として用いられている。臨時の変化音は奏者の指で弦をストップして行われる。

(小泉)

3. 東アフリカのハープ

古代エジプトの弓形ハープの流れと思われる素朴な形のハープが、現在でも東アフリカの各地に、種々の名称で呼ばれ、使用されている。

る。弦の数も四十二本くらいまで、さまざまであるが、主として歌の伴奏や、簡単な独奏に用いられる。(小泉)

4. ヌリスタン・ハープ [ワージ (waji)]

アフガニスタンの北部ヌリスタン地方にのみ用いられるハープ。ひょうたん型の共鳴箱にとりつけられた弓形ハープ。古代シルクロードの文化とともにメソポタミア方面から来たものか、或はインドの舟型ハープが変化したものかは不明である。(小泉)

A-IV アジアの弓奏楽器

1. ジョーゼ (gose)

イラクの弓奏楽器。ココナツの殻でできた半球状の胴に皮をはり、これを貫通する棹に三、四弦の金属弦をはり、弓奏する。せん細な表情に富み、主として声楽の伴奏に使われる。(小泉)

2. ルバーブ (rubab)

イラクのベドウィン(遊牧民)が用いる弓奏楽器。箱型の胴の表面と裏面に皮をはり、馬毛を束ねた一弦を、やはり馬毛の弓で擦奏する。ベドウィンの民謡や語りものの伴奏に使われる。(小泉)

3. ルバーブ (rebab)

インドネシアの弓奏楽器。アラブのルバーブが渡ったもので、東南アジア風な装飾により、独特の形と奏法を発達させた。通常はガムラン(打楽器を主とする合奏)の中で、奏される。二弦(金属)を完全五度に調弦し、馬毛の弓で擦奏する。(小泉)

4. 胡弓 (こきゅう)

日本の弓奏楽器。三味線を小型にしたような胴と棹をもち、長大

な弓で擦奏する。棹の中子先は長くのびて、この楽器を垂直に保持する奏者の両膝の間にはさむ。三弦のものと四弦のものがあり、四弦のものは第三、第四弦(高音弦)を同律に調弦する。普通は三下り(完全四度+完全四度)の調弦。奏者は胴を左右に回転させて、低音弦や高音弦を選んで奏する。(小泉)

5. 携琴 (けいきん)

日本の明清楽(みんしんがく)で用いられた弓奏楽器。もとは中国のもので、西洋音楽の流行以前に、盛んに行われた。広い意味で、中国の弓奏楽器を意味する胡琴の一種。(小泉)

6. 胡琴 (こきん)

日本の明清楽(みんしんがく)で用いられた弓奏楽器。もとは中国のもので、代表的な擦弦楽器。筒型の胴に蛇の皮をはり、二本の絹糸弦の間に馬毛の弓をはさんで擦奏する。奏者は左膝の上に楽器を垂直に立て、左右の弦のいずれかを弓でこする。劇音楽の伴奏や、管弦の合奏に用いられる。(小泉)

A-V 東アジアの箏琴類

1. 和琴 (わごん)

日本の雅楽にふくまれる神楽(かぐら)に用いられる撥弦楽器。六本の絹糸弦を、長箱型の胴にはった箏類の一種。三韓楽や唐楽の渡来以前からわが国に存在したといわれ、最近滋賀県の服部遺跡(五世紀AD)から、ほぼ同形の和琴が発掘された。調弦は音高順ではなく、古来いろいろな方法が用いられたが現在はそのうちの一種が用いられる。コトサキで弦をアルペジオ風にはじくほか、直接に指

ではじく。

(小泉)

2. 楽箏 (がくそう)

雅楽で用いる箏。十三本の絹糸弦をはる。胴の作り方や奏者の右手の三本の指にはめる義爪の形などが異なるほかは、後世の俗箏とよく似ている。

(小泉)

3. 八雲琴 (やくもこと)

二絃琴の一種。江戸時代の後期から用いられ、一絃琴 (須磨琴) と同じように、同律に調律された二弦を、左手指にはめた管で押えて、弦長を加減し、右手指にはめた管ではじく。

(小泉)

4. 二十一弦琴 (にじゅういちげんきん)

中国の箏の一種。古代には十三弦の箏、二十五〜二十六弦の瑟などがあつた。後代各種の弦数の箏が作られ、これもその一種である。

(小泉)

5. 伽倻琴 (カヤグム)

韓国・朝鮮の箏。十二本の絹糸弦をはる。奏者は楽器の片側を膝の上にのせ、右手の指で直接にはじく。正倉院の中にも、この同系の弦があり新羅琴 (しらぎこと) とよばれていた。

(小泉)

6. カチャッピ・インドウン (kacapi indung)

インドネシアのスンダ地方 (ジャワ島西部) で用いられるチター属の撥弦楽器。カチャッピ・リンチとともに合奏などに用いられる。舟型の共鳴箱の表板に多くの金属弦をはり、奏者は左右の人さし指ではじく。

(小泉)

7. カチャッピ・リンチ (kacapi rinci)

カチャッピ・インドウンと同じく、スンダのチター属。前者より

やや小型で、高音を受け持ち、はやいリズムを刻んで演奏する。

(小泉)

8. チェレンブン (celempung)

インドネシアの中部ジャワのガムラン合奏に用いられる撥弦楽器。左右の親指の爪ではじく。

(小泉)

9. チェレンプンガン (celempungan)

インドネシアのスンダで用いられる打弦楽器。もとは竹筒の切出し弦を用いたものであつたが、今は胴は木製で、弦は麻糸を用いるようになった。リズム楽器として使う。

(小泉)

B I 横笛のいろいろ

1. フルート 一鍵

一鍵のフルートは、一七〇〇年前後から一八五〇年前後まで、かなり長い期間使用されていた。この楽器はロンドンのダルメイン (D'Almaine) 社で一八三四〜一八五八年の間に製作されたもので、low pitch のF管と推定される。材質はツゲである。

(吉田)

2. フルート 一鍵

この楽器は、クヴァンツ・モデルの一鍵のフルートの複製品である。バツハ、モーツァルトの時代に使用された標準的な楽器である。ドイツのシュタインコプフ (Steinkopf) 製作。

(吉田)

3. フルート 四鍵

Esの鍵一つであつた一鍵のフルートに、E、Gis、Bの三個の鍵が加えられたフルート。これ等の三個の鍵をつけたのは一七七四年頃、ロンドンのポッター (Richard Potter) が最初と言われている。し

かし展示の楽器は、一八五〇年頃のドイツにおいて製作されたものである。

(吉田)

4. フルート 五鍵

四鍵のフルートにCの鍵を加えたもので、ベートーヴェン時代に使用された型のもの。製作は十九世紀後半、フランスのティブヴィーユ (Thibouville) 社である。

(吉田)

5. フルート 改良型

古い形のフルートから現在のベーム式のフルートに移行する間のフルートのうち、最も多数の鍵をつけられたもので、吹口がシュヴェドラー (Schwedler) 型と言われる特殊な形態をもったもの。製作はベルリンのモーリッツ (C.W. Moritz) 社で一九〇〇年代に入ってから作られたものである。

(吉田)

6. 標準フルート

現在一般に使用されている所謂ベーム式フルートの創始者ベーム製作のものと思われる。鍵の形、材質、楽器の形態すべてからベーム製作はたしかであるが、残念なことに製作者記入の箇所である頭部管と中部管の接続部を破損、改造のため製作者名がなくなっている。

(吉田)

7. 標準フルート

現在の標準型フルートであるが、低音域のD、中音域のDの音程を正しくするための特別の鍵をもった楽器。ドイツ、メーニツヒ (M. Mönig) 製。長らくウィーン・フィルハーモニーにおいて使用されていた。

(吉田)

8. アルト・フルート

G調のアルト・フルート。ベームにより初めて製作された低音用フルート。左手親指により操作されるオクターブ鍵をもっている。この楽器は日本で製作されたものである。

(吉田)

9. アルト・フルート

一八六七年式。ルーダール・カルチ社 (Rudall Carte & Co.) 製作。ベーム式フルート以後最も改良され、音響学的には理想的な機械装置をもった楽器である。しかし機構が複雑であるために、数多くは製作されていない。

(吉田)

10. バス・フルート

C調の低音フルート。現代の音楽作品に使用されだした楽器。

(吉田)

11. コントラバス・フルート

G調のアルト・フルートをさらに一オクターブ下まで音域を拡げたもの。ドイツのヴェツェル (Werner Wetzel) 製作。あらゆる木管楽器のうちに最も新しい楽器の一種である。

(吉田)

12. 神楽笛 (かぐらぶえ)、竜笛 (りゅうてき)、高麗笛 (こまぶえ)

雅楽に用いる竹製のよこ笛。雅楽の管楽器には、このほかに笙 (しやう) と箏 (ひちりき) があるが、単にフエと呼ぶときは、これらのよこ笛をさす。竜笛は横笛 (おうてき) とも呼び、唐楽 (中国・東南アジア系の雅楽) に用いるほか、催馬楽 (さいばら) などの歌ものにも用い、聞く機会が多い。高麗笛 (狛笛) は高麗楽 (朝鮮半島系の雅楽) に用い、神楽笛は神楽 (わが国固有の祭式雅楽) などに用いる。三種のうち最大の神楽笛は全長約四五・五cmで音域がhか

らc[♯]、次の竜笛は全長約四〇cmで音域がc[♯]からd[♯]、高麗笛は全長約三六・五cmで音域がd[♯]からe[♯]で、約二オクターブの音が出る。これは同じ指づかいでも、唇の使いかたと息の強弱で、フタラと呼ぶ低い音と、セメと呼ぶオクターブ高い音が出るからである。指穴は、竜笛が七箇所、神楽笛・高麗笛が六箇所ある。総体の構造は三種ともほぼ同じく、外部をカバ（細く裂いた桜の皮）で巻き、内部に朱ウルシを塗り、保持しやすくするために、頭部に重りを詰めて先端を閉鎖し、そこに金欄を張る。金欄の色は、竜笛が赤、高麗笛が紫紺、神楽笛が緑である。

（横道）

15. 能管（のうかん）

能楽（狂言および能）に用いる竹製のよこ笛。通常は単にフエと称するが、他種のよこ笛と区別する時は能管という。能管はなお、歌舞伎および長唄の囃子、江戸系の里神楽などでも、曲の一部に使用する。全長約三九cm、指穴は七箇所、音域は約二オクターブで雅楽の竜笛に類するが、作成段階で音高を調律しないので、一本一本で音高がすこしずつ違う。それで差支えないのは、他の旋律楽器や歌唱との音程を限定した使用法がないためで、演奏者の自由に任せるところが大きいからである。外見で竜笛と異なる点は、穴の周囲を朱ウルシで塗ること、頭部に金欄を張らずに彫刻した金具を装着することなどであるが、製法は大いに異なる。能管は、太さの違う三本の竹を継ぎ合わせて作り、しかも主部の竹は、縦に数条に割ったものを裏返しにして、竹の肉側を外に向けて合わせて作るのを良くする。また指穴より頭部寄りの位置の内部に、ノドと称する短い竹を挿入して固定し、その部分の内径を狭くしてあり、これは他のよ

こ笛に見られない特異な点である。

（横道）

16. 清笛（しんてき）

明清楽（みんしんがく）に用いる竹製のよこ笛。明清楽は、近世わが国に渡来定着した中国の音楽で、現在長崎県などに伝承されている。明楽と清楽はもと別種目として伝来したのだが、一般には包括して明清楽と称する。そのため明笛・清笛ともに明笛と呼ばれるのが普通だが、本来は清笛が半音高いという。もともと構造は両者とも同じで、全長約六五cm、六箇所の指穴があり、そのほかに、指穴より頭部寄りに一箇所の響き穴を有する。この穴に、竹紙（ちくし）と称する薄膜を張ることによって、独特の音色を出す。竹紙は太い竹の内面の皮膜が本来のものである。以上のほか、両端を象牙や骨で飾り、尾部に穴を設けて房付きのひもを通すなどの点で、わが国固有のよこ笛と区別できる。

（横道）

17. 篠笛（しのぶえ）

歌舞伎および長唄の囃子に用いる竹製で指穴七箇所のよこ笛で、竹笛（たけぶえ）とも称する。なお広義には、竹の素地がそのまま見えるよこ笛を、特別な構造でないかぎりすべて篠笛と称するが、今回は始めに述べたものを展示する。三味線音楽は、歌唱者の声域の高低に従って調弦を変えるので、これと合奏する篠笛も、高低各種のものが用意されている。すなわち、最低音の一本（d[♯]）から、二本（d[♯]・三本（e[♯]）と十二本（c[♯]）まで十二種あるのだが、常用するのは三本から十本までで、多くは頭部に数字で明示してある。展示するのは、四本から十本までの七種である。割れを防ぐために両端をすこし籐（とう）で巻き、内部にウルシを塗るだけの簡素な姿が、篠

笛の特色である。

(横道)

B II ルネッサンス、バロック期の管楽器

1 2. コルネット (cornet) [ツィンク (Zink)]

胴体は木管、歌口は現代の金管楽器と同じ形状をもち、十六世紀から十七世紀において最も重要な役割を果たし、特にサン・マルコ寺院におけるガブリエリの器楽曲には欠くことのできない楽器。直線型、曲線型の二種が展示されているが、ともにC調である。また、ともにメック (H. Moock) 社による複製である。(中山)

3 4. ナチュラル・トランペット (natural trumpet)

無弁時代の自然トランペットで、倍音のみによる旋律の演奏ができる。初期には信号用であったが、後に高音を演奏する奏者が出現、高音で音階演奏が可能となり、芸術音楽にも参加した。なお、これはニュールンベルクの楽器製作者ハース (Wolf Wilhelm Haas) (二六八一―一七六〇) の作品より複製されたものである。ともにマインル・ウント・ラウベル (Meinl & Lauber) 社によるが、調はCとDである。(中山)

5. ナチュラル・トランペット (natural trumpet)

バツハ時代の画家ハウスマン (E.G. Haussmann) (一六九五―一七七四) の描いたライヒェ (Gottfried Reiche) (一六六七―一七三四) の肖像画の中のナチュラル・トランペットを複製したもの。バツハがカンタータなどに使用したのはこの型のものとされている。渦巻型で調はD。フィンケ (Helmut Finke) の作である。(中山)

6. セルパン (serpent)

一五九〇年にフランスで発明されたこの楽器は主として軍楽隊で使用され、低音域を受けもつ木管楽器でツィンクの仲間である。

胴体は二・四mの木管だが歌口は象牙(のちに金属)で金管楽器のそれと同じである。扱い易いように蛇形にしているところからこの名がついた。(中山)

B III 信号ラッパの仲間

1 2. ポスト・トランペット (post trumpet)

中世以来の直線型トランペットで、様式、戦闘などに使用されたが、後に郵便馬車の宿駅などにも設備されていた。展示されているものはともに直線型で、一方はG調で、オーストリアのブリュン (Cidrich Brünn) 社、一八三二年の作であり、他方はC調で、ロンドンのケーラー・アンド・サンズ (Köhler & Sons) 社、一八五一年の製作によるものである。(中山)

3 4. 信号用トランペット

巻型の二つのうち、一方はパリのブレヴエト (Gautrot Breveto) 社、一八五〇年頃の作であり、他方はロンドンのメイヤー・アンド・ハリソン (Mayers & Harrison) 社による一九〇〇年初め頃の作である。(中山)

5 6. 狩猟用ホーン

渦巻型の小さい方は、ミュンヘンのガンター (H. Ganter) 社、大きい方は、やはりミュンヘンのフリュスト・プレス (Frist-Press) 社の製作によるものである。(中山)

7. インドの喇叭 (carnix, Carnyx)

竜の頭部をもった喇叭で、宗教上の儀式に使用されている。

8. ティベットの喇叭 (dun-chen, dung-chen) (中山)
ラマ僧が宗教上の儀式に使用しているもの。

9. 法螺貝 (ほらがい) (中山)
展示されているものは日本製であるが、法螺貝は日本だけでなく、材料入手の容易な南の国々に多くみかけることができ、その歴史は大変古い。

10. 豆腐屋のラッパ (中山)
日本の豆腐屋が戸外で用いるクラリネット属のラッパ。吹口の中に、金属性の打簧 (ピーティング・リード) がついている。吹いたり、吸ったり、また手で筒をおさえたりして、音高を加減し、少くとも二音を発する。

日本製の豆腐屋が戸外で用いるクラリネット属のラッパ。吹口の中に、金属性の打簧 (ピーティング・リード) がついている。吹いたり、吸ったり、また手で筒をおさえたりして、音高を加減し、少くとも二音を発する。

B-IV ひもで締める太鼓類

1. 小鼓 (こつづみ)

能楽および長唄の囃子に用いる。奏者は左手で調緒を握り、右肩の上にのせ、右手指で革面を打つ。調緒の扱いと打ち方で、ポ、プ、チ、タと呼ばれる四種の音が用いられる。

2. 大鼓 (おおつづみ) (白砂)

一般には「おおかわ」と呼ばれている。能楽および長唄の囃子に用いる。奏者は左脇にかかえ、右手指で革面を打つ。打ち方は、チョン、ツ、ドンの三種がある。

3. 太鼓 (たいこ) (白砂)

締太鼓 (しめだいこ)、猿樂太鼓 (さるがくだいこ) とも呼ばれる。能楽および長唄の囃子に用いる。二本の棒状の桴で打つ。打ち方には天、テ、ケ、ツ、クの五種がある。

4. 羯鼓 (かっこ) (白砂)

雅楽器。唐楽 (左方) の拍子进行を打つのに用いる。楽器は台の上にのせられ、奏者は左右の手に細長い桴を持って両面の皮を打つ。打ち方には、正 (せい) —— 拍の頭でひとつ打つもの —— と来 (らい) —— 細かく刻んで打つものの —— 二種がある。

5. 三の鼓 (さんのつづみ) (白砂)

雅楽器。高麗楽 (右方) の拍子进行を打つのに用いる。床の上に横たえ、奏者は左右の手に桴を持って皮面を打つ。

6. 桶胴 (おけどう) (白砂)

郷土芸能や下座音楽で用いる。

7. 大拍子 (だいびょうし) (白砂)

神楽の楽器。二本の細い桴を用いて打つ。

8. ムリダンガム (mrdanga) (白砂)

南インドの楽器。両方の膜面には黒いねりものがつけられている。ひざの上にのせて用いる。右側の皮がトニカに調律されている。両手の手のひらと指で演奏する。

9. 杖鼓 (じょうこ) (白砂)

朝鮮半島で広く用いられている楽器でチャングと呼ぶ。散調 (さんじょう) や民謡などの重要な打楽器であり、雅楽にも使われる。奏者からみて左側の皮は厚くて大きく、低音を出す。手のひらまたは桴で打つ。右側は薄くて小さく、竹の細い弦を用いて高音の打音

やトレモロ音を出す。

(白砂)

10. クンダン (kendang)

インドネシアの樽型両面太鼓。ガムラン音楽ではテンポの指示の役割を受け持つ。両手で両面を打つ。

(白砂)

C 日本の材料で作られた初期の西洋楽器

1. コントラバス

檜材で作ったもの。¾型で明治三十六年九月十一日に備品台帳に登録されている。作者は不明。

(白砂)

2. バイオリン

桑材で作ったもの。Ⅹ型で明治四十一年七月二十二日に備品台帳に備品番号七十台目のバイオリンとして登録されている。作者は松永一定。

(白砂)

3. ピッコロ・トランペット

昭和十年三月作。へ調。昭和九年、当時の東京音楽学校管弦楽部がバツハの「ブランデンブルク協奏曲第二番」を演奏するべく、フランスより帰国した管楽器理論家、平林勇氏に設計を依頼、日本管楽器製造株式会社に製作を命じたもの。

(中山)

D-Ⅰ 機械による発音器

1. 紙腔琴 (しこうきん)

明治中期に流行したもの。考案者は戸田欽堂(東京)で、東京音楽学校教授上原六四郎指導、西川オルガン製作所製作により、十字屋楽器展で発表された。考案製作は明治二十六年(一八九三)。ハン

ドルを廻すと箱の中でふいごが動作し、ハーモニカを吸うのと同じ効果を出す。ハーモニカ風の発音部の口は紙でふさがれ、この紙に穴があいているとその音だけ鳴る。音楽に従って穴のあけられた巻紙を用いて、自動的に演奏させる。

(白砂)

2. オルゴール

フランス製。昭和十三年侯爵徳川頼貞より本校に寄贈された。円筒面に立てられた爪によって振動片がはじかれ、一周で一曲を演奏する。大型なので広い音域と太鼓や鐘の類まで装備されており、にぎやかな効果を出している。

(白砂)

D-Ⅱ 蓄音機、録音機

1. 蠟管蓄音機 (ろうかんちくおんき)

今から一〇〇年前エジソンが発明した形式の蓄音機。音の振動を蠟の管の表面の凹凸振動として記録する方式である。間もなく左右の振動(現行のLPと同じ)のものが開発され、この凹凸式はすたれた。

(白砂)

2. 蓄音機 A

蠟管に代って使われ出した蓄音機。

(白砂)

3. 蓄音機 B

昭和二十八年頃まで楽理科などの授業に用いていたもの。

授業の都度、教室に運んだ。

(白砂)

4. テープレコーダー (tape recorder)

昭和二十五年購入。ソニーの前身である東通工(東京通信工業)の製作で、我が国で最初に出されたプロ用テープレコーダーの一種。

本学で購入したテープレコーダーの第一号である。奏楽堂での演奏や大学定期演奏などの録音に使用された。

(白砂)

5. 円盤録音機 (えんばんろくおんき)

テレフンケン (Telefunken) 社製。昭和二十六年テープレコーダーが購入されるまで使用されていた。

(白砂)

D-III その他

1. イントネーション・トレーナー (intonation trainer)

現在、一般的に音程感覚を教育するためにはピアノが最もすぐれている。しかし合奏、合唱の際、純正の三度、六度等はピアノではやや不完全である。このイントネーション・トレーナーは、本学音楽部の音楽部門が、一人では和音を作れない音楽器の弱点を補うために、独自に開発した和音感覚の訓練装置である。すなわち、このイントネーション・トレーナーによると純正の三和音あるいは属七の和音を作ることができる。また、それらの音を直ちに十二平均率の音と比較することができる。また、例えばピタゴラスの音階、バロック時代のミーンション (中全音律) 等を自由に作ることができる。歴史的な音階と現代の平均率との比較研究も可能である。平均率の和音においても、各音の音量のコントロールにより、和音の性格を確認することができる。音色の研究も倍音の加減により研究可能である。まだ考案されて間もないので、今後の工夫により、その他にもいろいろな利用方法が考えられつつある段階である。

(吉田)

2. シンセサイザー (synthesizer)

一九五三年に西ドイツのケルン放送局で世界最初の電子音楽が制

作されたのち、世界各国の主要放送局、工科大学などが電子音楽の装置を備えるようになったが、この頃の装置のほとんどが真空管で作られていたため、形は大型で、その費用も莫大であり、個人がこの装置を有することなどはほとんど不可能に近かった。

しかし、その後の電子工学の著しい進歩によって電子機器類がトランジスター化され、形も小型となり、また真空管式に比べてはるかに低費用で作ることが可能となった。

このため、かつて大放送局のみが有していた電子音楽の装置と同じ能力をもつ、あるいはそれ以上の能力をもつ装置が電子機器のメーカーによって製造、販売されることになった。これがシンセサイザーである。また、ごく最近では、IC (集積回路) の発達により、真空管時代にはおよそ不可能であった装置も装備されている。

本学はつぎの各社のシンセサイザーを設備している。

Buchla (米)	Modular Electronic Music System 100
Arp (米)	Music Synthesizer 2500
Moog (米)	Music Synthesizer P-III
Roland (日)	Music Synthesizer System 700, 101, 102, 103, 104

各製品の仕様は、むろんそれぞれ異なるが、その基本は共通しており、つぎの諸機器を基本としている。

1. 電圧制御発振器	Voltage Controlled Oscillator
超低周波発振器	Low Frequency Oscillator
2. 雑音発生器	Noise Generator
3. 電圧制御フィルター	

Voltage Controlled Filter

(Lopass Filter)

(Hipass Filter)

(Bandpass Filter)

4. リング変調器
Ring Modulator

5. 残響付加器
Reverberation Unit

6. 仕上り発生器
Envelope Generator

7. 電圧制御増幅器
Voltage Controlled Amplifier

8. ミキサー
Audio Mixer

9. 鍵盤
Keyboard

10. 連続電圧源
Sequencer

(南)

3. 楽譜タイプライター

寄贈者のお父さんが、大正十年頃アメリカから買ってきたものらしい。倉庫の中に長らく眠っているのが発見され、本校に寄付された。
(白砂)

〔横組〕(『東京芸術大学創立九十周年記念 楽器展―東洋の音・西洋の音』東京芸術大学芸術資料館・音楽学部・音楽学部楽器展実行委員会 二七頁)

三 創立百周年記念事業

昭和六十二年の東京芸術大学創立百周年記念事業に先立ち、昭和五十六年七月、評議会は「東京芸術大学創立百周年事業実行準備委員会要項」を定めた。

東京芸術大学創立一〇〇周年記念事業準備委員会要項を次のように定める。

昭和五十六年七月二十一日

東京芸術大学長 山本正男

東京芸術大学創立一〇〇周年記念事業

準備委員会要項

(昭和五十六年七月十六日評議会裁定)

(趣旨)

第一 東京芸術大学に、東京芸術大学創立一〇〇周年記念事業を企画・立案するため、東京芸術大学創立一〇〇周年記念事業準備委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(委員会の構成)

第二 委員会の委員は、次の各号に掲げる者をもって組織し、委員は、学長が委嘱する。

(1) 教授会が選出する教授又は助教授各五名

(2) 事務局長

(委員の任期)

第三 委員の任期は、二年とする。

(任務)

第四 委員会は、次の各号に掲げる事項について審議する。

(1) 一〇〇周年記念式典に関すること。

(2) 一〇〇年史の編集に関すること。

(3) 記念展及び記念演奏会に関すること。

(4) その他必要な事業に関すること。